

野田の旧石器時代

(のだのきゅうせつきじだい)



本郷A遺跡出土石器

日本にも旧石器時代はあるのか？ 明治以来、この疑問が追求されてきました。明治38年(1905)、英国人医師マンローは、神奈川県早川溪谷での旧石器発見を発表。大正6年(1917)、歴史学者喜田貞吉は、大阪府藤井寺市国府遺跡で、縄文時代の地層よりも下の粘土層から石器を発見、旧石器としますが、両者を考古学界は受け入れませんでした。

昭和21年(1946)、群馬県みどり市岩宿で切通しのローム層中から石器を発見していた相沢忠洋は、昭和24年、黒曜石製槍先(こくようせきせいやりさき)を発見、それを見た明治大学の杉原荘介はすぐに調査を行い、石器を発掘します。考古学者によって始めてローム層中から旧石器の存在を確認したのです。以後、全国的に旧石器の発見は続きますが、これは公共事業などに伴い、調査面積が飛躍的に広がったことが大きいと考えられます。

現在、日本の旧石器遺跡のほとんどは後期旧石器時代(35,000～14,000年前)のもので、市域でも発見されます。それ以前の先ナイフ形石器文化(40,000～35,000年前)は、市域では確認されていません。後期旧石器時代はナイフ形石器文化Ⅰ(35,000～28,000年前)、ナイフ形石器文化Ⅱ(28,000～18,000年前)、細石刃(器)文化(18,000～16,000年前)と続きます。

ナイフ形Ⅰの時期の前半頃の遺跡として、岩名(いわな)第14遺跡、倉之橋(くらのはし)遺跡などが発見されています。この時期の終末頃、日本列島は大規模な寒冷気候に見舞われます。それは鹿児島湾の始良(あいら)巨大噴火のためでした。火山灰が北海道にまで拡がり、長期間日光をさえぎったためでした。そして、ナイフ形石器文化Ⅱ(28,000～18,000年前)に移行しますが、気候変動は人々の生活に大きな影響を及ぼしたようで、これまで石器群は全国的に均一化されていましたが、石器、殊にナイフ形石器に地方色が出現しました。また、この時期に石焼きの調理施設が出現するのも特徴といえます。後半期のナイフ形石器は全般に小形化し、市内では尾崎南(おさきみなみ)・三ツ堀六畝(みつぼりろくせ)・榎ノ内(まきのうち)・下根(しもね)貝塚などから出土しています。

旧石器時代最後の石器群に特徴的なのは、細石刃(器)(さいせきじん(き))文化(18,000～16,000年前)です。この文化は二つに大別でき、一つは北海道・東北・中部・関東北部、もう一つは関東南部から西に分布していますが、野田市域では未確認です。

終末期には、石槍(いしやり)をもつ文化が登場し、市域では上原遺跡から安山岩(あんざんがん)製の石槍が小形ナイフ形石器とともに発見されています。縄文時代草創期になると、本郷A遺跡のように大形化した石槍に石斧(せきふ)、土器が伴うようになります。

市域には石器のための石材がないので、すべて関東周辺部から運ばれます。特に石器に多く使われる黒曜石の産地は、栃木県高原山(たかはらやま)、長野県、伊豆、神津島(こうづしま)などです。その中で、旧石器に使われたのは高原山産のもので、市域の尾崎南、三ツ堀六畝遺跡でも発見されています。尾崎南遺跡では神津島産の黒曜石が発見されていますが、縄文時代になると南関東では神津島産の需要が高まるのは興味深く思われます。

《詳しくは…》

* 野田市史編さん委員会編 2005 『野田市史 資料編 考古』 野田市

野田の遺跡から出土した黒曜石の運搬推定ルート

